

# 乳を刺す

黒門町伝七捕物帳

邦枝完二

青空文庫



星灯とうろう

陰曆いんれき七月、盛りの夏が過ぎた江戸の町に、初秋の風と共に盃う蘭盆らんぼんが訪れると、人々の胸には言い合わせたように、亡き人懐かしいほのかな思いと共に、三界万霊などという言葉が浮いてくる。

今宵は江戸名物の、青山百ひやくにんちよう人町ほしとうの星灯ろう御上覧のため、將軍家が御寵愛ごちようあいのお光の方共々お成りとあつて、界限かいわいはいつもの静けさにも似ず、人々の往き来ににぎわっていた。

「なアお牧まき、お春や常吉は、まさか道草を食つてゐるわけじゃあるまいね、大層遅いじゃないか」

「そんなことはござんせんよ。お組頭くみがしらのお屋敷は、ここから五丁ちようとは、離れちやいないんですもの。きつと將軍のお成りが、遅れているんでしようよ」

梅窓院の近くにある薬種問屋やくしゆどんや伊吹屋源兵衛の家では、大奥に奉公に上がっている娘の由利ゆりが、今夜は特に宿退りやどさがを頂けるとあつて、半年振りに見る顔が待ち遠しく、先ほど妹娘のお春に、手代の常吉をつけて、途中まで迎えに出したのであつたが、奥の座敷に接待の用意が出来ると、源兵衛はしびれを切らした挙句あげく、すでにとつぷり日の暮れた門口へと、首から先に出向いたのだつた。

ふと気がつけば、いつの間にもやら女房のお牧も、源兵衛の背後

に寄り添って、百人町の方角へと首を伸ばしていた。

「ねえ、旦那。今夜お由利が帰ってきましたら、平太郎さんとの話を、すっかり決めて、一日も速くお城から退るさがようにしたいもんですねえ」

「それはわたしも、望んでいるんだが、お由利の便りでは、上役の袖そでノ井さんとやらが、可愛がつて下さるとかで、急いで退りたくはないとのこと。今時の娘の心はわたしにや解げせないよ」

「何んといつても、町家の娘が、いつまでも御奉公をしているのは、間違いの元ですよ。……そういえば、本当に遅いようですが、何か変わったことでも、あったんじやござんせんかしら?……」

お牧の心配そうな様子に、同じ思いの源兵衛も、町の彼方かなたへ眼

をやった。

百人町の一帯は、どの屋敷も、高さ五、六間もある杉丸太の先へ、杉の葉へ包んだ屋根を取り付けて、その下へ灯ろうとうを掲げてあることとて、さながら群むらがる星ほしのように美しかった。

明和、寛政のころまでは、江戸の民衆は、急にこぞつて家毎に高灯ろうをつるして、仏を迎えたものであったが、天保の今では、まったく廃すたれて、寺々や吉原の玉屋山さんざぶろう三郎の見世に、その面影をしのぶばかり。しかも、鉄砲組同心の住む、青山百人町だけが、いまだにそのしきたりを改めることのない珍しい情景は、江戸名物の一つとなつて、盆のうちの一夜は、将軍家が組頭の屋敷を休憩所に、わざわざ駕がをまげるのが、長い間の慣ならわしになつていた。

今宵も將軍家いえよし慶は、愛妾のお光の方と共にお成りとあつて、

お光の方に仕えている源兵衛の娘由利も、その行列に加わつたのであるが、日ごろの勤め振りにめでて、途中から実家へ帰ることを許されたとの報せが、すでにきのうの朝、伊吹屋一家を、有うちよ頂天うてんにさせていたのだつた。

待ちかねた夫婦の前へ、いきなり闇の中から現われた常吉の聲は弾んでいた。

「旦那様。おかみさんもお喜びなさいまし」

「おお、常吉か。お由利はどうした？」

「へい。今し方お行列が、遠藤様へお着きになりましたので、お嬢様にもお暇が出ました。今、あすこへおいでなさいますが、お

お客様が御一しよだと仰しやいますので、一つ走り、お先へまいりました」

そこへ、お春の持った提ちようちん灯が近付いて、その灯りの中に、くつきりお由利の顔が浮かんで見えた。

文ぶんきん金の高島田に、につこりとした御殿女中の拵こしらえであるが、夏の名残りの化粧の美しさは、わが娘ながら、まぶしいばかりにつややかであった。

「おお、お由利……」

「よくまア帰って来ておくれだねえ」

「お父さん、おっ母さん。お達者で……」

連れ立って帰って来た朋ほうばい輩らしい女中や、お茶坊主らしい人



をそのままにして、小走りに進み寄った由利は、両親に手を執られて、胸が一杯になったのであろう。早くも瞼がぬれてまぶたいた。

お春と常吉が、由利の帰宅を報せに、見世先から駈け込んだので、伊吹屋は急に活き活きとにぎわっていった。

## 朝風

「親分、大変だ」

「やいやい、岩吉、騷そうぞう々しいぞ。御用を預かる家で、一々大変

だなんぞと云ってたんじゃ、客人に笑われるぜ。気をつけろい」

「ハッ。こいつア大おおしくじりだ。いつもの癖が出ちまったんで。

……こりア黒門町の親分、お早うございます」

「岩さん。朝から大層な働きのようだな」

「伝七親分の前でござんすが、十年に一度つて騒ぎを、聞き込んでめえりやしたんで……」

「岩、そりア何だ」

親分の問いに、打てば響く<sup>ひび</sup>ように、岩吉の声は冴えた。

「へい。ゆうべ、將軍様のお供をして来た御殿女中が、殺されやした」

青山北町の岡つ引留五郎の家では、昨夜は老衰<sup>ろうすい</sup>で死んだ父親の通夜<sup>つや</sup>とあつて、並み居る人達の眼ははれぼつたかつたが、岩吉の声に、一斉に眼をみはつた。

留五郎の父親も江戸では名の通った捕物師だったので、黒門町の伝七も、わが子のように可愛がって貰った縁があるところから、子分の獅子ししつ鼻ばなの竹造を連れて、一夜をここに明かしたのであったが、今も今、帰ろうと立ちかけた矢先に、聞き捨てならぬ珍しい話だった。

「岩、てめえの話ア、騷そうぞう々しくつていけねえ。黒門町もいる事だ。もうちつと落ち着いて話をしねえ」

「いや北町の」

しかりつける留五郎を、笑いながら伝七はとめた。

「あわてる方じや滅多めったに退ひけを取らねえ男が、こちらにもいるんだ。おいらア、あわて者にや慣なれてるから、ひとつ、今のつづき

を聞かして貰おうじゃねえか」

「冗談じゃありやせんぜ」

と獅子つ鼻の竹が首を振った。

「親分。何も青山くんだりまで来て、あつしを引き合いに出さなくつても、ようござんしょう」

「ははは。人ア、引き合いに出されるうちが、花だと思ひねえ。

……ところで岩さん。筋アどういうんだ？」

岩吉は、ごくりと固唾かたずを呑んだ。

「実ア梅窓院通りの、伊吹屋の娘でござんす」

「じゃア大奥へ勤めている、お由利だな。いってえどこで殺され  
たんだ」

留五郎も思わずひとひぎ乗り出した。

「ゆうべ、自分の家へ帰って来やしてね。大勢おおぜいで祝いの真似を

して飲んだり食ったりして、寝間へ這入ったそうですが、今朝お袋が起こしに行くと、胸元を一突き、もう冷たくなつてたという話なんで……」

「うーむ」

「当人は、星灯ろう見物の、お供で来たんだそうでした。二日だけ、宿退りを頂いたってわけだと聞きやした。何しろ帰ったその晩の出来事でげすから、両親を初め見世の者ア気が転倒てんとうしてえたんでござんしよう。飛び込んでつたあつしをつかまえて、まるつきりまとまりのつかねえことを申しやす——この界限じゃア、

小町娘と評判だったお由利さんのこと。一つ親分に、出向いてお貰い申そうと、横ツ飛びに帰つてめえりやした」

「そうか。よく聴き込んだ。將軍様は、ゆうべのうち中に御帰還ごきかんだが、それに関わりのあることだけに、今日明日の中にうち罅ちひを開けなくちや、お奉行の遠山様のお顔に係わるというもんだ。直ぐに行こう」  
立ち上がった留五郎は、黙々と聴いていた伝七を見た。

「黒門町。いま聞きなすつた通りだ。迷惑だろうが、一緒に来ちや貰えめえか」

「うむ。お前さんさえよけれア、いかにもお供ともをしよう。仏様を抱えているお前だ。手伝いが出来りや、おいらも本望よ」

「有難てえ。長引いたら、今度ばかりや、ほうぼうから集まつて

来るに違えねえから、愚<sup>ぐ</sup>凶<sup>ぐ</sup>愚<sup>ぐ</sup>凶<sup>ぐ</sup>しちやいらねえ仕事、兄貴が来ておくんなさりや、千人力だ」

留五郎が急に勇み立って、伝七共々出て行こうとするのを、呼び止めたのは竹造だった。

「親分」

「何だ」

「あつしやまだ、御殿女中<sup>ごてん</sup>の殺されたのア、見たことがねえんで。……きようはひとつ、手柄を立てさしておくんなせえ」

「バカ野郎」

「おつと黒門町の。竹さんも連れて行こう。何か飛び廻ってもらうことが、あるに違えねえ」

「へッ、へッ。有難え。きつとあつしの鼻が、お役に立つことがありやすぜ」

獅子つ鼻の竹は、こう云つてからすそをくるりと捲まくつた。

### 乳房の傷

「あ、北町の親分。御苦労様でございます。どうぞお入りなさつて下さいまし」

手代の常吉が、真つ青な顔で揉もみて手をしながら迎えるのを、眉間に深いシワを刻きざんだ留五郎はちよいとうなずいただけで、さつさと奥へ通つた。



その後から、伝七、竹造、しんがりは顔の売れている岩吉が、小僧達に何か言葉をかけながら続いた。

見世は大戸おおどが下ろされて薄うすぐら暗く、通された離れの座敷には、お由利の床がまだそのままに、枕まくらべ辺に一本線香と、水が供えてあるばかり。いかにも血なまぐさい事件のあつた家らしく、陰いんざ惨んな空気が満ちていた。

「旦那、飛んだことでござんしたねえ。折角お宿退りをなすつたお由利さんが、こんな不仕合わせな目にあいなさるとア、まったく夢のようだ」

「北町の親分、お察し下さいまし。半年振りで帰つて来たものを一晩も、ゆつくり寝やすますことが出来なかつたなんて、何という因い

果んがでございましょう」

「こんなことでしたら、帰つて来てくれない方が、どんなによろしゅうござんしたろう」

源兵衛がおろおろ声になれば、お牧も一言云つたきり、その場に泣き伏していた。

「どうぞ親分。早く殺した奴を、捕えておくんなさいまし。せめて娘を、成じょうぶつ 仏ぶつさせてやりとうございまする」

「心配しなさんな。お由利さんとア小娘の時から知り合つてるおいらだ。青山小町と迄までうたわれた娘を、こんな惨むごい目に遇あわしやがった奴を、おめおめ生かしておくもんじゃねえ。それに今日は、おいらの兄貴分の、黒門町の伝七がうちへ来合せていたのを幸

い、一緒に来てもらつたんだからなあ」

「えッ。ではこちら様が、下谷の伝七親分さんで？……」

夫婦は驚きながら、幾度も頭を下げた。

「お忙しいところを、申し訳ございません。何分よろしく、お願い申しまする」

「いや、お役に立つかは判らねえが、こうして来るのも、やつぱり縁があるんだらうから、出来るだけは、働いてみることにしましょうよ」

伝七は四分一しふいちの煙管きせるをつかんだまま、柔やさしくうなずいた。

留五郎は死体の傍へ寄つて、じつとお由利の顔を見守つた。他

の者も枕許を取り巻いて、カタズをのんだ。

着物から、長じゅばん、はだ着と、前をひらくと、眼に沁みるばかりの真つ白なはだが、あたかも生きているもののようにあらわれた。

「兄貴、やっぱりこれが命取りだな」

「うむ、刃物は大した切れ味だ」

こんもりと盛り上がった乳房の下を、一と刺し、キツサキが心臓に達したと見えて、衣類は朱に染まあけまっているが、大して苦しんだ様子もないままに息は絶えていた。

留五郎が、また元のように着物を直すと、伝七も共々片手拝みをして、源兵衛の方へ向き直った。

「旦那。それじゃゆうべの様子を、一通り聞かしてもらおう」

「はい。……お由利が帰ってまいりましたのは、丁度五ツ時どきでございしましたが、お光の方様へお仕え申して居ります、表おもてつかい使づかいのお方とやらで、三十くらいの袖そでノ井い様と申すお女中衆と、鷗おうせき硯せきと申されるお坊主衆とが一しよでございました」

「その二人は、何だつて来なすつたんだ？」

「袖ノ井様は、百人町にお家があり、お由利とは、大層仲よくして頂いて居りましたそうで、同じように宿やど退さりのお許しが出ましたのを幸い、送つて行つて上げようと、お立ち寄り下さいましたのでございます。……お坊主の鷗おうせき硯せき様は、お光の方様のお声掛かりで、途中を護つて下さいましたので。……」

「それで、二人は、座敷へ上がったのかね」

「左様でございます。手前共でも膳の用意なども、いたして居りましたので、お二方を上席に、お由利と平太郎が並びまして、一口召し上がって頂きました」

「平太郎と云うと？……」

「同じ町内の結城屋ゆうきやのせがれで、お由利がお城を退りましたら、一緒にする約束になって居ります。——昨夜も呼び迎えて居りました」

「そんなら、その時にや、別に変わったことは、なかつたんだな」

「それはもう、みんな楽しそうで、鴟碓様は、唄や手踊りておどりが、大層お上手でございました。さんざん笑わせて頂きましたくらいで

「ございました」

「うむ。みんなが帰つたのは？」

「鴟硯様は、お行列のお供には、加わらなくてもよいのだと、申されて居りましたが、それでも四ツ時ごろには、駕籠でお帰りになり、暫くして、星灯ろうを見物がてら、お由利が袖ノ井様を、送つて行くと申しまするので、遠くもない所でもあり、常吉をつけてやりましたが、ものの半はんとき刻ばかりで、お由利もかえつてまいました」

「……………」

「それから親子水入らずで、いろいろと話がはずみましたが、疲れていることでもございますし明日の朝は、ゆつくり寝たいから、

渡り廊下になっている、離れがいいと申しますので、ここへ寝かしましたのでございます。愚痴のようではございますが、今から思いますと、手前共の部屋へ寝かしましたら、と、そればかりが、残念でなりません」

「旦那。大層失礼なことを、おたずねするが……」  
伝七が口をはさんだ。

「平太郎さんと、お由利さんとは割わりない仲になっていなすつたのかね」

「いえいえ。左様なことはございません。お由利も、親の口から申しますのは、何でございませうが、固かたい女で、平太郎もまた気の弱い男、祝しゅうげん言げんの日のきまるのを、待つて居りますような訳で



「ごぎいます」

「今朝はまだ、来ちやア居ないようだね」

「はい。あんまり騒ぎが大きくなりましてはと、見世の者にも、口止めをいたしてごぎいますし、結城屋へも、報してはごぎいませんので……」

それを聞いていた留五郎は、伝七のうなずくを見て、急に改まった。

「お内儀かみさん。じやいよいよ、調べにかかろう。ひとつ、家内中の者を、呼んでもらいましょう」

## 夜半の出来事

お牧が出て行くと、間もなく、何れも色あおざめた男女五人が、入口へ並んだ。

「それでは申し上げますが、一番前に居りますのが、妹娘のお春で、十七になります」

「お由利さんは、確か十九だったね」

「はい、厄年でございます」

父親の声に、丁寧に頭を下げたのは、結綿ゆいわたの髪に、桃色の手絡がらをかけた、姉に似たキリヨウよし、しかもなかなかのしっかり者らしかった。

「その次に居りますのが、手代の常吉で、行く行くは、お春のム

コにいたしまして、この見世を継がせたいと思つて居ります。子供の中から、奉公いたして居りまして、まことによく働いてくれますので……」

常吉は頭を赤らめて、両手をついたが、常々それと決めていて、何の感じもないのか、お春は姉の方を見つめたまま、顔色も変えなかつた。

後は田舎から出て来て間もないような、小僧の民吉と松三郎。これには留五郎も伝七も、眼をひかれた様子はなかつた。

「手前共は、地味じみな商売でございまして、わたくしがまだおもに働いて居りますところから、これくらいの人數で、十分やつてけますので。……台所をやらせて居りますのが、一番末に座つて

居ります、下女のおみねでございます。十八になりますが、一昨年、ぼうしゆう房州から雇い入れました、正直者でございます」

きまり悪げに、眼を伏せているおみねは、女中のこととて、地味な身なりはしているが、肩も丸味を帯び、胸元も高く、ときどき留五郎の方を見る顔には、何となく色気があつて、一応男の眼をひく女であつた。

「いや、よく判つた。こうしてみんなに並んでもらつたので、調べも大層楽に出来るというもんだ。どうだな、この中にいるだけかはゆうべ一同が寝静まつてから、お由利さんの部屋へ、這入つて行つた者のあるのを、知つてるに違いねえんだが、遠慮はいらねえから、話してもらいたいな」

「……………」

「みんなが黙つてると、一人一人を、責めなくちやならねえ。時によると、根こそぎお奉行所へ、引つ張つて行くかも知れねえんだ。おいらの方じゃア、大体の見当がついて居て、こんなこともきくんだから、正直に云わなくちやいけねえぜ」

「……………」

「よしッ。それじゃア、一人一人にきこう。お春さんを一人残してほかの者ア、次の部屋で待つててくんな」

一同が出て行つてしまつても、留五郎は不興ふきようげ氣であつた。

「お春さん、ここに居るのア、両親だけだ。姉のあだを討つためにも、本当のことを云わなくちやならねえ。いまお前が、何か云

いたそうにしていたから、みんなを遠ざけたんだ。——さア云いねえ」

「はい。……時刻は、はつきりとは判りませんが、真夜中に、御ご不浄ふじょうへまいりました時、廊下を足音を忍ばせて、通った者がございます」

「うむ」

「わたしが廊下へ出ました時、手燭の光に、驚いたように振り返りましたのは、もうずっと向こうへ行つて居りましたが、確かに常どんでございました」

「常吉?……」

源兵衛が、びっくりしたようにオウム返しに問い返した。

「あの廊下は、姉さんの寝ている離れから、台所まで行くようになって居ります。その途中から、常どんが小僧達と一緒に寝ている部屋へ、曲がるようになって居りますので、その時は、何とも思つてはおりませんでしたけど、あれは姉さんの所へ、行つた帰りだと思ひます」

「そうか。……他に何か今度のことについて、氣のついたことはねえか」

「ございません」

「よし。じゃアお前さんは、あっちへ行つて、小僧達を呼んで来ねえ」

「はい」

重苦しい空気が、一同の前に流れた。

「常吉に限って……」

「でも、……そう云えば、お由利のことというところ、夢中になる方ですからね。きのうだって、自分一人で迎えに行くなんて、云ってたじゃござんせんか」

源兵衛がお春の言葉を耳に掛けない様子に、お牧は同調しなかつた。

「小僧達を、連れてまいりました」

「……………」

お春の後ろへすわった小僧達は、互いに顔を見合わせて、おどおどと落ち着かなかつた。



「おい。お前達は、ゆうべ寝てから、常吉が部屋から外へ出て行ったのに、気がついていただろう」

「……………」

松三郎が困って民吉を見ると、民吉はにらむようにそれを見返したが、やがて留五郎をまぶしそうに仰いだ。

「松どんは、よく眠っていたらしいんですが、あたしは、常どんに足をけつ飛ばされて、眼が覚めました。痛えなアといいますが、暗くって見えないんだから、勘弁しなと云って、自分の床へ這入ったようでした」

「そうか。それじゃ夜半に、外へ出たことは間違えねえな？」

「どうだ。今朝常吉に、何か変わった様子はなかったか」

「あ、そうだ」

松三郎が、急に声を大きくした。

「さい角かくや干ほし肝ぎもを削けずる、薄刃うすばの小刀を、磨といでくれと頼まれましてあたしが磨とぎました」

「なに、刃物？……」

留五郎の顔には、急に晴晴した微笑が浮かんだ。

「お春さん。お前の推すいり量ようは、当たってるぜ。直ぐに常吉を呼んで来ねえ」

はず  
外はずされた門かぬき

「常吉。おめえいま、裏の方へ行つてたそうだな。いよいよ、逃げ出すつもりだったに違えなからうが、そうは問屋でおろさねえぜ」

「いえ。なんで左様なことを、いたしましょう。それは……」

留五郎の前へすわらされた常吉は、お春、小僧達の云つたことを聞かされて、悄然と頭を垂れたが、追い打ちを掛けるように、留五郎に云われた言葉には、決然として顔を挙げた。

「今朝、お嬢さんのことを知りましてから、何か手掛かりはないかと探して居りましたら、裏の木戸のかんぬきの外れているのに、気がついたのでございます」

「えッ、かんぬきが?……」

源兵衛が横よこあい合から叫んだ。留五郎は、その様子を冷ややかに見たが、急に眼を光らせたのは伝七だった。

「では旦那。そいつは、いつもかかっていたんですね」

「左様でございます。暮れ六つになりますと、必ずかけることになつて居りまして、昨夕方も、わたくしが見回りまして、確かに見届けているのでございます」

「じゃア兄貴は？……」

不服そうに留五郎は、伝七を見た。

「外から這入つて来た奴が、あると云いなさるのか」

「さあてな。あるとは云わねえ。だが、無いとも云えねえ。それを調べてみなくちや、ならねえと思うだけよ」

「はははは。この野郎が、おのれにかかった疑いを、ごま化すためにそんなことを云い出したんだ。やい常吉」

留五郎の声に、常吉はビクリと肩をふるわした。

「てめえは、お由利さんに、想いおもを寄せてたんだろう。平太郎に取られるのが、たまらなくなつたんで、飛んでもねえ真似を、しやがったに違いねえ。その心しんてい底が判つてればこそ、てめえを養子に迎えるはずのお春さんが、てめえの味方になつちやアくれねえんだ。どうだ、申し開きがあるか」

「……………」

「お春さん。そうだろう？」

「わたしは、常吉が殺したとは申しませんが、姉さんと常吉とを

較くらべますと、姉さんの味方をしたいと、思いますので……」

「よし、常吉。どうだ？」

「わ、わたくしは、子供の時分、御奉公に参りましてから、上のお嬢さんには、いつも優やさしくして頂きました。母親のないわたくしはもつたいないことながら、母とも姉とも、お慕したいしてききましただけに、お嬢様を殺すなどと、そんな大それたことが、出来るわけはございません。……刃物はきよう、犀角散さいかくさんを、削けずることになって居りましたので、磨とがしましたばかり。決して、血を落としたんじやございません」

「それじやてめえは、お春さんに見られた時ア、離れからの帰りにゃなかつたのか」

「……………」

「かわや厠にやお春さんが這入つていたんだ。てめえは用もねえのに廊下を歩いていたんじゃあるめえ」

「……………」

「よし。もうきくことアねえ。これから、お奉行所へしよつ引いて行つて、砂をかましてやるから覚悟しろ。お奉行様は、泣く子も黙る遠山左衛門尉さえものじょう様だ。ひとたまりもあるもんじゃねえ。

—— おお旦那、野郎の部屋にある刃物を、持つて来ておくんなせえ」

そう云うと留五郎は、いきなり常吉にナワをうつた。

「へ、へい……………」

源兵衛が、よろめきなながら出て行くのを見て、留五郎は体を揺すつて笑つた。

「伝七兄貴。どうやら片付いたようだ。さア一しよに引き揚げよう」

「いや、折角せつかくだが、おいらは残ろう。おめえは気の済むまで、そいつを調べるがいい」

「じゃ何か。お前さんはまだ、外から入つた奴の仕業しわざだと、にらんでるんだな」

「そりア判らねえ。だが北町の。おいらアどうもまだ、調べ残しがあるように思われるんだ。おいらは、得心とくしんのいくまで調べねえと、飯がうまくねえ性しょうぶん分だ。ちつとも遠慮することアねえ



から、おめえは、先へ引き揚げてくんねえ。なアに、夕方までにや歸つて、おめえんとこの、仏様に聞いてもらうよ」

色もみじ

常吉の繩なわじり尻をとつて、留五郎と岩吉が揚々と引き揚げて行つた後は、度を失つた一同が、恐る恐る上眼遣うわめづかいに、伝七をぬすみ見るばかりであつた。

「じやア旦那。あつしはこれから、裏庭を一と回りするから、まだだれも外へ出ちやアならねえが、仏様のことにでも、取り掛かンねえ。それから、おみねといったな、その女中は。お前さんに

案内してもらおう」

「いえ、わたしが……」

お春が素速すばやく立ち上がろうとするのを、伝七はさり気なく留めた。

「なアに、おみねの方がいい。台所や裏口なんてものア、女中の方が明るいもんだ。おい竹」

「へい」

「おめえは……」

伝七のささやく声に、大ききうなずいた獅子つ鼻の竹は、ぱつと表へ飛び出して行った。

おみねを先へ立てて、裏庭へ出た伝七は、ゆっくり隅々まで眼

を通したが、裏木戸の傍の庭石へ腰をおろすと、自分の前に転がっている材木の一端へ、おみねを掛けさせた。

「おめえの話を、聴こうじゃねえか。常吉が縄を掛けられた時の、おめえの顔は、ただじゃなかつた。何かあるだろうから、話してみねえ」

「はい……」

おみねの張りのある眼には、急に涙が浮かんだ。

「親分さん。つ、常どんは、お嬢さんを殺したんじやアありません」

「どうしてお前に、それが判るんだ？」

「さつき、お春お嬢さんが、廊下を歩いていたらと仰しやいました」

が、常どんはあの時まで、女中部屋にいたのでございます」

「そんな夜半に、どうしてお前の部屋にいたんだ？ おかしいじやねえか」

「はい……」

おみねの蒼あおざめた顔が、ぽつと赤くなつた。

「おはずかしいことでございますけど、常どんの命に係わることですから、何もかも申し上げます。二人は……常どんとわたくしは、言い交かわした仲でございます」

「何んだって？」

「この春でございました。わたくしが病気で、十日ばかり寝ました時、常どんが、毎晩看病してくれましたので、ついその親切に

ほだされまして……」

「だつておめえ、常吉はこの家の、むこ 贅になる男じゃアねえか」

「左様でございます。ですけど、お春お嬢さんは、常どんが小僧さんだつたというので、大層邪じゃけん 慳になさいます。それでときどきは、常どんも、口惜し泣きに泣いて居りますんで。……わたくしも日頃から、気の毒に思つて居ました」

「うむ」

「ゆうべも旦那は、お春お嬢さんと常どんを、お祝いの席へ着かせようと、なすつたんですけど、お春お嬢さんは常どんと、一緒にじやいやだと仰しやつて、さつさと寝ておしまいになりました。

それというのも……」

「それというのも?……」

「お春お嬢さんは、平太郎さんを想つてらつしやるからでござい  
ます」

「平太郎といえは、死んだお由利さんと、祝しゅうげん言いするはずだつ  
た男だが。……それじゃ男の方でも、お春を想っているのか」

「それは、わたくしには判りませんが、ゆうべのことを思います  
と……」

「ゆうべのことという?……?」

「……」

「つまらねえ遠慮をしてると、常吉ばかりか、おめえのためにも  
ならねえんだよ。はつきり云うがいい」

「は、はい。……実は、夜半過ぎまで、常どんは、わたしの所に居ましたが、これからお由利様の、お部屋の行灯あんどんの油を差しに行くんだと云つて、離れはなへまいりましたんで……」

「うむ」

「それから先は、わたしは何んにも知りませんでした。今朝の騒ぎになつてから、ゆうべは飛んでもないことをした、と云うんでございます」

「……………」

「常どんが、離れへ行きますと、障子の中に、人の居る様子なので、びつくりして引き返してしまつたと申します——こんなことなら、顔を見て置きやアよかつた。平太郎さんだと思つたばっか

りに、着物の柄も判らないと、常どんは口惜しがって居りました」  
「そうか。だが、そんならどうしてさつき、常吉はそれを云わな  
かったんだらうな。それだけでも、身の証あかしの助けになるとい  
うもんだが……」

「はい、それはこうでございます。わたしは、両親が貧乏ですの  
で、このお見世へまいります時に、まとまったお金を借りて居ま  
す。途中でしくじりがございますと、そのお金をお返しして、国  
へ帰らなければなりません。きつと常どんは、それを考えて、何  
もかも黙っていてくれたんだと思います」

「成程」

「それに常どんは、お由利様思いでございますから、お嬢様のお



部屋に、男がいたなどとは、どうしてもいえなかつたんではござ  
いますまいか」

伝七が大きく頷うなずいた時だった。

「親分、連れて来やした」

突然竹道の声が聞こえたとおもうと、右手を掴まれて、裏木戸  
から幽霊のように這入って来たのは、平太郎であった。

散っていた花

「お、平太郎か。ここへ掛けねえ」

「……………」

おみねを立ち去らした跡を指さすと、平太郎は、阿波人形のように胴を真つ直ぐにしたまま、首だけ垂れて腰を下ろした。

「おめえが、お由利さんの部屋へ這入ったのよ、何刻なんどきだった？」

「……………」

「今朝、ここのお内儀かみが、お由利さんの死んでるのを見て騒ぎ出した時、駈けつけた旦那の気がついたのよ、縁側の雨戸が二寸ばかり、開いてたつてことだ。馴なれた奴よ、決してそんな間抜けな真似はしやアしねえ。素人しろうとに限つて、あわてて、そんなドジを踏むんだ。おめえ、夢中ンなつて、逃げ出したに違えあるめえ」

「恐れ入りました」

「うぬ、御用だッ」

竹道が頭の上から一喝した。

「あ、お待ち下さいまし……」

冷水でも浴びせられたように、震えふる上がった平太郎は、思わず伝七を拜んだ。

「竹、待ちねえ。平太郎、おめえ何かいてえことがあるのか」

「へい。……お由利さんの所へ、忍び込みましたのは、わたくしに相違ごございませんが、その時にはもうお由利さんは、死んで居たのでごございます……」

「平太郎。口から出まかせをいうと、反かえつておめえの、お咎とがめが重くなるぜ」

伝七は鋭すくきめつけた。

「いいえ、決して親分さんに、嘘は申しません。ゆうべお由利さんが、お客様を送つて、帰つてまいりましてから、小父さんや小母さんに、わたしも加わりまして、よもやまばなし四方山話をいたしました」

「うむ」

「小父さんも小母さんも、口を揃えて、近いうちに祝しゅうげん言げんをするようと、勧めてくれますのに、お由利さんは、うんとは申しません。そればかりでなく、来年三月は、いろいろ都合があつて、そで袖ノ井いさんと、宿退りをしない約束をしてあるから、今度帰つてくるのは、来年の今ごろになるだろうなどと申しました」

「……………」

「わたしは、間もなく切り上げて帰りましたが、家へ帰つても口

惜しくて、どうしても眠られませんか。それで、どうかしてもう一度お由利さんと、とつくり話し合いたいと思ひまして、ふらふらと、家を出てしまいました」

「きいてくれねえ時にや、ひと思いに、殺す気になつてたんだな」「飛んでもございませぬ。だいいち、刃物も持つては居りませぬ。ただ、心を尽くして話しましたら、また考えも変わるだろうと、それだけが、望みでございました」

「それで、裏からは、どうして這入つたんだ？」

「家を出ます時には、塀を乗り越えてでもと、思つて居りましたが、何気なく裏木戸を押してみますと、わけもなく開きましたので……」

「すると、かんぬき門が外れていたというんだな」

「左様でございます。それから庭伝いに、縁側まで行つて、そつと雨戸を開けまして、枕元の方へ行きますと、有ありあけあんどん明行灯の灯で、ぼんやりと見えましたのは、両のこぶしを握りしめている、裸のお由利さんの死骸でございました」

「うむ」

「あつと云つたつきり、わたしは、何も見えなくなつてしまいました。したが、間もなく気がつきましたのは、こうして居れば、自分に人殺しの疑いがかかる、ということでした。もう恐ろしさ、誰を起こす考えも出ませず、あわてて、逃げて帰つたのでございます」

「そうじやあるめえ。おめえは、お春にそそのかさされて、太え料ようけん簡かんを起こしたんだらう？」

「決して、そんなことはございません。わたしは、お春のような勝ち気な女は、大嫌いでございます」

今まで堪たえに堪たえていたのであろう。平太郎の眼からは、急に涙が頬を伝わった。

「よし、これからおめえの、親父に逢おう。おい竹。ここの旦那に、おいらア一巡りしてくるからとそう云つて来ねえ」

いきなり立ち上がった伝七は、平太郎の手首を掴んだ。白く丸味を帯びた平太郎の腕は、女のように優しかった。

## 赤トンボ

「親分、そう急がなくても、いいじゃござんせんか」

「馬鹿野郎。御用中は忙しい体なんだ。てめえにつき合っちゃア  
いらねえんだ」

「でも、平太郎は、ホシじやアねえんでげしよう」

「だから、なおさらじやねえか」

「お由利さんの部屋へ、忍んで行った奴を、挙げねえんなら、ま  
アぼつぼつやるより他にや、仕方がござんすまい。どつかそこい  
らで、一と休みしようじやござんせんか」

「竹。おめえ休みたけりやア、いつまででも、そこいらで寝てき



ていいぜ」

「冗談云つちやアいけません。親分、ま、待っておくんなせえ」

梅窓院通りから、百人町へ足を速めて行く伝七は、獅子つ鼻の竹を、いい加減にあしらいながら、何か思案しあんに耽たっている様子だった。

「竹、おめえに、働いて貰う時が来たぜ」

「えッ、あつしに?……有難え」

「ほかじやねえが、これから赤坂御門外へ行つて、溜池ためいけの麦むぎめ飯し茶屋を、洗つてくんねえ」

「あすこの茶屋なら、六軒ありやしてね。女の数が三十人。いま評判なのア、お滝におつま……」

「女を知りてえんじやねえ。ゆうべ五ツ頃から、今日の明け方までに、どんな客が上がったか、そいつを調べて来るんだ。こつちの目当ては、おうせき 鷗 硯 という茶坊主だが、まだ外に、拾いものがあるかも知れねえからな」

「へい。ですが、茶坊主が、なんであすこへ行きやすんで？……」

「ゆうべ伊吹屋いぶきやからの帰りに、源兵衛が如才なく、二分や一両は、握らしたに違えねえ。坊主の住居は、浜松町だそうだから、丁度都合のいい足溜まりあしだだ。しけ込んだ上で、何を企むたくらか知れねえつて奴だ」

「成程」

「伊吹屋へ上がり込んで、みんなの機嫌きげんを取るような坊主だ。お

城から、誰に何を云いつかつて来てるか、知れたもんじやねえから、抜かつちやならねえぜ」

「ようござんす。きつと何か、土産を掴みやげつかんでめえりやす」

「おいらはこれから、一軒寄つて黒門町へ歸つてる。おめえの方の様子を知つてからでねえと、仕事の順序が立たねえから、ちつとも速く頼むぜ」

「おつと合点。親分も、お気をつけて行つておくんなせえ」

土けむりをあげて、駈け出した竹造を見送ると、伝七はそのまま表通りへ曲がつて、古びた小さい屋敷の門を潜くぐった。

「御免なすつて。……お城勤めをなすつてらつしやる、袖ノ井さんのお宅は、こちらでござんしょうか」

「はい、はい。誰方どなたでございます」

たるんだ声で答えながら、足許も覚おぼ束つかなく出て来たのは、茶ひとえの単衣ひとえに、山の出た黒くろ縷じゆす子の帯をしめた、召使いらしい老婆であつた。

「わたしは、お奉行所の、御用を承つてる者でござんすが、袖ノ井さんに、ちよいとお目にかかりたいことがござんして、お伺い申しました」

「あの、どのような御用で？」

「伊吹屋さんの娘さんの、お由利さんのことにつきまして、お伺い申しましたが……」

「少々お待ち下さいまし」

伝七は、向こうの土間の天井に吊るしてある用心籠など眺めながら黙って待った。

と、間もなく老婆は引き返して来た。

「お待たせいたしました。只今お嬢様は、御不在でございますが、旦那様が、お目にかかりますそうで。……どうぞお上がり下さいまし」

袖ノ井が留守とは意外であったが、このまま引き退ることは出来なかつた。

壁の落ちかかった奥の間へ導かれた伝七は、この家の主あるしを見る  
と心の中で思わず「あッ」と叫んだ。

「伝七殿と申されるか。わしは袖の父、真しんさい齋さいでございます」

床の上へ坐っているのは、業ごうびよう病びようも末になつたのであろう。

顔は崩れ、声は嗄かれて、齡さえも定かでない老人であつた。

「どなたにも、お目に掛からぬのじやが、御用の筋と聞いてお通し申した。どのようなことでござらうか」

「ほかでもござんせんが、実は、袖ノ井さんの朋輩衆ほうばいしゆうの、伊

吹屋のお由利さんが、ゆうべ急に亡くなられましたんで、袖ノ井さんに、何かとお訊ねいたしたいと存じやして……」

「何と云われる。由利殿が亡くなられた？……あの娘御とは、殊ことの外親ほかしくいたし、昨夜もここへ見えられたが……」

「左様でござんすか。そんなに、仲よくしておいでなすつたんで？……」

「左様。着る物も髪のものも、みな揃いのものを、用い居ると申して居ったが、袖が聞いたら、さだめし嘆くことでござろう」

十年の長い間、病床に引き籠ひこもつてはいるものの、以前は松平伊予守の典医てんいを勤めていた真齋しんさいとて、その言うところは、人柄をしのばせるものがあつた。

「で、お嬢様は、どちらへお出ましでござんしょう?」

「あれは、わしの使いで、四谷の親戚まで出向いたが、八ツまでには、帰つて来るはずじゃ。わしで判ることは、何でも話して進ぜるが……」

「いえ、そんならまた、お帰りの時分に伺いましょう。どうぞよろしく、申し上げておくんなさいやし」

背筋<sup>せすじ</sup>へ水を注<sup>そそ</sup>がれる思いで、言葉を交わしていた伝七は、ふと気付いたことがあるままに、早々にして席を立つた。

### お俊の知恵

「なアお俊。柳下亭の読みものかなんかで、見たような気がするんだが、女同士が夫婦のように想い合うなんてことが、本当にあるもんなのか」

「さア、どういうもんでしようねえ。何かあったんですか」

黒門町のわが家へ帰って来た伝七は、茶の間で、女房お俊の、茶をいれている姿を見ながら、突然言葉をかけた。



「うむ。ちよいと困ったことがあつての」

「あたしや、そんなことは知りませんけれど。……とみもと富本のお稽け古いこに通つてた時分、御師おしよ匠さんとこへ来る羽織衆が、そんな話をしていたことがありましたよ。女芝居の一座や、女牢の中なんぞでは、女同士が言い交わして、入れぼくろまで、するようなこともあるんだつて……」

「そうか」

伝七が、腕をこまねいて考え込んだところへ、帰つた来たのは竹道だった。

「親分、行つてめえりやした」

「おお、早かつたじゃねえか。やつこは一晩、しつぽりと濡ぬれて

行つたか」

「恐れ入りやした。お手の筋で。……鴟碇さんは、さかえ屋へ上がつていやしたが、面白く騒いで寝て今朝七ツ頃に帰つて行つたという、こちらに取つちやア、何の変へんてつ哲もねえ話なんで。……どうも相済みません」

「いや、御苦労だつた。それでおいらの考えが纏まつた。早速もう一度、百人町へ行こう。今度アちつとア、手ごたえがあるぜ」

「ハッ、そいつア有難え話でげす」

「今夜は、遅くなるかも知れねえから、提灯の仕度をしてくんねえ」

「合点で……」

氣負い込んだ竹が、出て行つたと思うと、あわてて引き返して来た。

「親分。いま袖ノ井さんの使いだという婆さんが、駕籠でめえりやした」

「袖ノ井の？……」

伝七は手にしていた煙管きせるを、じつと睨にらんでいたが、それをごろりと畳の上へ転がした。

「よし。ここへ通しねえ」

「へい」

竹に案内されて這入つて来たのは、先刻見た老婆に違いなかつたが、さっぱりと着替えをして、頭を撫でつけている様子は、見

違えるぐらい上品になっていた。

「先程は、まことに御苦勞様でございました。今し方、お嬢様がお歸りになりましたので」

「いや、あつしこそ、御無礼ごぶれいいたしやしたが、御用は？」

「お嬢様の仰しやいますには、夕景にお見え下さるそうでござい  
ますが、病人の気が立つて居りますので、明朝にして頂きたいの  
だそうでございます」

「……………」

「今夜一晩、病人の介抱に、人々の孝養こうようの真似をいたしました、  
明朝は、お城へ帰りますゆえ、その際なれば、ゆつくりお目にか  
かれようと、かように申されまして……………」

「そんなら今日は、親子水入らずで、居たいと仰しやるんですね」  
「はい。わたしもお暇が出ましたので、親分さんが御承知下さいましたら、浅草の娘のところへ、泊まりにまいりますので……」

伝七は拾い上げた煙管に、きざみを詰めることも忘れて考え込んだが、やがて雁首がんくびで、長火鉢の縁を叩いた。

「ようござんしよう。お邪魔じやまするのも、心ない仕業しわざだ。またお前さんの折角の保養を、妨げても気の毒だ。伝七は明日うしの午の刻頃までは、伺いませんから、どうぞゆつくりしておくんなさい」

「有離うございます。それでは何分、お願い申します」

お俊のすすめた茶を押し頂いて飲むと、老婆は、いそいそと帰って行った。

「親分、冗談じゃござんせんぜ。提灯はどうなりやすんで？」

「なア竹。せいては事を仕損ずると云うじゃねえか」

「だって親分。常吉でもなし、平太郎でもなし、鷗硯でもなしつてことになった今、袖ノ井に、何をお聴きなさるのか知りやせんが、これも明日のことだつてんじや、いい加減、気がくさるじやござんせんか」

「ははは。まだくさるのア早えよ。こんな日にや、早く寝ちまつて、またあした出直すんだ」

かきおき

明るい朝が来て、澄んだ初秋の空からは、眩まぶしい太陽の下に、小鳥の声が軒庭さわがに喧さわしかった。

「お早うございます。親分はおいででござんしょうか。留五郎からまいりました。ちよいとここで、お目に掛かりとう存じます」

「おお、岩吉さんか。大層また早いじゃねえか」

竹造は、裏の方で何かしているらしく、神棚の水を取り替えていた伝七が、気軽く上がりかまちへ出て行った。

「親分の留五郎が、上がりますはずでござんすが、取り混んで居りますため、手前みょうだい名代だいで、とりあえずお報せに伺いやした」

「そして用の筋というの？」

「今朝、暁あけ方がたに、袖ノ井がが、自害して果てましたんで……」

「そうか。……やっぱり死んだか……」

「じゃア親分にや、袖ノ井の死ぬことが、きのうから判つてたんでござんすか」

岩吉の声に、あわてて出て来た竹が、頓とんきよう狂きやうな声を出したが、

伝七はそれには答えなかつた。

「岩さん、まア掛けてくんねえ。で、病人はどうした？」

「へえ。病人も袖ノ井の手で、殺しましたんでござんす。毎朝病人の、布の巻き替えを手伝います隣りの隠居が見つけてまして、手前共へ、飛んでめえりやした。親分とあつしが、直ぐに出向きましたが咽喉を突いて、腑伏うつぶしている袖ノ井の傍にありやしたこの手紙を、親分が披ひらいて見ましたので、事情はすっかり判りやした。



知らねえこととて、お先へ拝見いたしやしたが、早速黒門町の親分へ、お届けしろと申しますので、あつしが持つて伺いました次第でございやす」

岩吉の差し出すものを、伝七が受け取つて見れば、一通の書置き。――

この度立ちかえりて、父の病いが業ごうびよう病びようなりしことを知りおどろき、ましてやその姿を由利どのに見られし悲しさは、たとえるものもこれなく候。そうろう由利どのとの睦むつみもこれまでなるべく、またその口よりお城へ洩もれ候節は、いかなる大事となるやも計られず、いまは自ら死を覚悟いたし申し候。ついては深夜、由利どのと忍び逢うやくそくなりしをさいわい、伊吹屋へまいり、

眠る由利どのを一刺しひとさにいたし申し候。この身もその場にて、死するつもりに候わしかど、病父に引かれて立ちかえり時移るうち、早くも調べの手はのびて、万事休きゆうし申し候。取調べの町人は情けある人とて一夜の猶予ゆうよを与えられ候まま、父に手あつく仕えし上、暁あけけ方眠りにつくを待ちて玉たまの緒おを絶たち、返す刀にて自らも冥途めいどの旅に上り候。あの世には悩みも恨みもこれあるまじく、父の手を執りて由利どのを追い、共に白はくぎ玉よく楼ろう中ちゆうの人となるが、いまはの際きわの喜びに御座候。

「おいお俊。やっぱり二人は、おめえの云ったような間柄だったんだなア」

「あたしには、判りませんけれど、その書置きを聞いていて、つ

「泣いてしまいましたよ」

岩吉へ茶を持って来たお俊は、袖口を眼に当てた。

「親分は、あつし達が、常吉をしよつ引いた時、もう袖ノ井に当たりをつけておいでなすつたんでござんすか」

「いいや、そうじゃねえ。ただ乳房を一刺しにした腕前は、町人にや、ちよいと難しいと思っただけだ。真しんさい齋の話しんさいを聞いている

うちにこいつア袖ノ井だと、はつきりと判つたが、使いを寄越されてみると、一晩だけア騒がねえで、その最後をきよ浄くさしてえと、黙つて手を束つかねていたわけだ。……岩さん御苦勞ごくろうだったの。それで、お届けの方は、すっかり済んだかい」

「へえ。ああいう女中衆は、こんなことになる、きのうのうち

に、お暇が出たことになりやすそうで。……後始末は留五郎親分に、すっかり委まかされやした。いま取り混みの最中でござんす」

「そうか。おいらも後から顔を出すか、何分宜敷く頼むと、留五郎どんに、くれぐれも伝えてくんねえ」

「へえ、かしこまりました」

そう云うと岩吉は、急に立ち上がって、しかつめらしい顔をした。

「伝七親分。このたびは真まことにどうも有難うござんした」

岩吉は不器用に頭を下げると、忙しそうに帰って行った。

「お俊、係り合いだから、香こうでん奠を包んでくんねえ」

「はい」

伝七はそう云ったが、孟蘭盆うらぼんに死んで行つた薄命の女達を悼いたんだのであろう、その眼は涙に濡れていた。

常吉が、即日釈放されたのは云うまでもない。



# 青空文庫情報

底本：「競作 黒門町伝七捕物帳」光文社文庫、光文社

1992（平成4）年2月20日初版1刷発行

親本：「黒門町捕物百話」桃源社

1954（昭和29）年発行

入力：大野晋

校正：noriko saito

2010年2月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。



# 乳を刺す

## 黒門町伝七捕物帳

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫  
著者 邦枝完二  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

#### Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>